

視察から調査へ

第3代校長小山健三(1858～1923)のもと、初期修学旅行の3つの特徴、すなわち、視察の陣容・視察先・視察の対象がそれぞれ見直された。

まず、それまで2人1組で実施されていた視察が、原則として単独での視察に変更された。これにより、毎年作成される報告書の数は単純計算で2倍になった。明治33(1900)年には本科を卒業した専攻部の学生と本科の学生が合同で調査を行っているが、この試みはこの年限りだったようである。

次に、視察先は複数の道府県を周遊する形から、1道府県、多くても隣接する2府県に密着する形に変わった。ただし、明治29(1896)年の第8回修学旅行では周遊型と地域密着型が併存しており、地域密着型に完全に移行するのは翌30年のことであった。

視察の対象は、地域の代表的な産業全般から特定の産業に切り替えられた。この切り替えは、周遊型から地域密着型への移行と軌を一にするものである。これに伴って報告書のタイトルには「視察」ではなく「調査」の文言が多用されるようになり、典型的なタイトルは「〇〇県××業調査報告書」となった。

調査の対象と地域は、その時々を経済的・社会的課題に即して設定された。この点は、明治後期に急成長を遂げた織物業の調査が明治30年代に集中的に行われたこと、労働運動の高まりを受け、大正7・8(1918・19)年に労働状態に関する調査が実施されたことから読み取れる。



織物業の調査報告書

手前左より、阿曾菊蔵『京都府及福井石川二県下修学旅行復命書』(M29)、中川太一『滋賀県機業調査報告書』(M34)。奥左より、石丸素一『名古屋地方修学旅行報告書』(M32)、水谷新太郎『新潟県下染織業調査報告書』(M34)、松村大助・渋谷良英『京都府織物業調査報告書』(M34)、河野恒三『京都機業取調報告書』(M36)。カッコ内は調査年。